

ヴァン・ダイク作

《馬上のチャールズ1世とサン・アントワーンの領主》に関する一考察 —同時代の英国宮廷におけるイタリア絵画コレクションとの関連を中心に—

柏 智久 (東京大学)

現在、英国王室コレクションに所蔵される、ヴァン・ダイク作《馬上のチャールズ1世とサン・アントワーンの領主》(1633年)は、1632年よりアントワープからロンドンに拠点を移し、チャールズ1世の宮廷画家として活動した時期の作例にあたる。チャールズ1世を描いた同様の肖像である、《狩猟場のチャールズ1世の肖像》(1636年頃、ルーヴル美術館)や《チャールズ1世の騎馬像》(1636-7年頃、ロンドン・ナショナル・ギャラリー)に先行する点で、ヴァン・ダイクが英国で手がけた騎馬肖像の先駆となる作品である。本発表では、先行研究を踏まえつつ、同作品の位置付けを同時代の英国宮廷におけるイタリア絵画コレクションとの関わりをもとに論じる。

本作品の図像の典拠に関しては、ルーベンス《レルマ公爵騎馬像》(1603年、プラド美術館)の構図に基本的に倣いながら、ティツィアーノ《カール5世の騎馬像》(1548年、プラド美術館)や同時代の版画など、複数の作例が指摘されている。まず、ここでは画面に従者であるピエール・アントワーン・ブルダンの挿入、凱旋門という舞台設定といった、本作品にみられる構成上の特徴を上記の関連作品との比較から確認する。

一方、本作品がセント・ジェームズ宮殿に所蔵されていたチャールズ1世のイタリア絵画コレクションとどのような関わりを持っていたかについては、あまり論じられていない。チャールズ1世在位の時代、同宮殿のギャラリーにはティツィアーノやジュリオ・ロマーノによる騎馬像を描いた作品も展示されていたことが先行研究から指摘されている。チャールズ1世の美術コレクションは、清教徒革命以後の1649年から1660年にかけての、いわゆる「大空位時代」の動乱の最中で散逸することとなるが、チャールズ1世は1623年のスペイン訪問に際しスペイン・ハプスブルク家所蔵のイタリア絵画、とりわけヴェネツィア派のコレクションを目にして以来、並々ならぬ関心を示していた。また、ヴァン・ダイクが1620年代のイタリア滞在中に記した《イタリア素描帖》(大英博物館所蔵)からも明らかなように、画家自身もヴェネツィア派絵画、とりわけティツィアーノを熱烈に愛好し、その点で両者は類似した絵画趣味を共有していたと考えられる。同コレクション中の一部の作品は詳細が不明となっているため、一部の失われた作品に関しては版画をもとに検討を行い、作品の来歴や関連文献を含めて本作品とチャールズ1世の宮廷コレクションとの関係を考察する。

最後に、本作品が専制君主としてのチャールズ1世のイメージ形成・伝播の一助となっただけでなく、王の宮廷におけるイタリア絵画愛好への画家の応答でもあることを指摘する。